The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	同年輩の他者に対する上下関係意識の比較基準と行動・感情
Author(s)	新井, 洋輔; 松井, 豊
Citation	対人社会心理学研究. 2003, 3, p. 23-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7686
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

同年輩の他者に対する上下関係意識の比較基準と行動・感情[1)]

新井 洋輔 (筑波大学大学院心理学研究科)
松井 豊 (筑波大学心理学系)

本研究の目的は、上下関係意識の比較基準となる年齢、学年、容姿、能力などの構造について検討し、それぞれの比較基準で上位者と判断された他者に対して生起する行動・感情と、比較基準との関連を検討することである。大学生232 名を対象として質問紙調査を行った。因子分析の結果、上下関係意識の比較基準は『外見・評判』『能力』『年齢・学年』の3側面に分けられた。比較基準と行動・感情との関係を検討した数量化Ⅲ類の結果から、『外見・評判』の点で上位と判断された他者には、相手を嫌い回避しようとする『嫌悪・回避』が生起した。『能力』の点で上位と判断された他者には、尊敬の念を持ち、親密になろうとする『親和・尊敬』が生起した。『年齢・学年』の点で上位者と判断された他者には、礼儀を重んじ従おうとする『礼儀・服従』が生起した。個人特性について検討した結果、公的自意識が高い人は『外見・評判』『能力』『年齢・学年』のすべての基準を重視し、優勝劣敗にこだわる人や保守的な人は『外見・評判』『能力』の基準を重視していた。

キーワード：上下関係意識、比較基準、対人行動、対人感情

問題と目的

本研究は、大学生の上下関係意識の比較基準となる年齢や学年、容姿、能力などの構造について検討し、それぞれの比較基準で「上位」と判断された他者に対して生起する行動・感情と比較基準との関連を検討する。

上下関係意識における比較基準の多様性

従来、上下関係意識に関わる研究は、社会的比較研究の分野においてなされてきた。高田（1990）は、大学生が自己と他者を比較しやすい側面には「容姿・外見」「能力」「性格」などがあることを明らかにしている。親密化過程研究においては、これらの側面のうち外見や評判は関係の初期に注目され、性格などは関係が深まってから注目されると理論化されている（松井, 1993）。これらの比較基準は、「容姿・外見」「能力」のように主観的な価値によって上下関係意識が生まれる不明確な基準であると考えられる。しかし、従来の上下関係の研究においては、上司部下や年功序列などの、より明確な比較基準によって生起する上下関係が検討されている。

上下関係のある対人関係の研究では、上司部下のように集団内における地位が明確に分けられた上下関係（淵上, 1994 など）や、集団への所属期間や年齢などの年功序列に基づいた上下関係（新井, 2000；田島・波多野, 1996 など）が主に議論されてきた。これらの研究においては、集団における地位や年齢・学年など、明確な比較基準によって生起する上下関係が検討されている。しかし、上下関係は理論的に、上位者の強制による支配関係と、自発的追従に基づく指導関係とに分けて捉えることが可能である（森, 1970, 1993）。したがって、上下関係は、年齢や地位などの明確な基準にもとづく上下関係だけでなく、能力や容姿などの不明確な基準について自他を比較する上下関係もあると考えられる。

自己概念に関する山本・松井・山成（1982）の研究では、自己概念が「社交」「スポーツ能力」「知性」「性」「容貌」などの11の側面に分けられ、側面ごとに自己評価への影響が異なることが明らかになっている。したがって、自己と他者とを比較する際にも、比較の基準となる側面は多様であると考えられる。そこで本研究では、容姿や能力などの不明確な比較基準と、学年や年齢という明確な比較基準とを併せて、これらの上下関係意識の比較基準の構造を検討する。

比較基準と行動・感情の関係

本研究では、上下関係意識の比較基準の構造を検討するために、それぞれの比較基準と、比較した結果生起する行動・感情との関係を検討する。

澤田（2002）の妬み感情に関する研究では、妬み感情が「何らかの点で及ばないという、場面に応じた感情反応」であるために、妬み感情と比較される側面との対応の間に一定の対応関係があると理論化し、検討を行っている。澤田（2002）は、児童を対象とした質問紙調査を実施し、「成績」「運動」「技術」を比較すると「くやしい」「恥ずかしい」などの感情が、「評価」「環境」「財産」を比較すると「腹が立つ」「うらやましい」などの感情が、「人気」「状態」で比較すると「悲しい」「つらい」などの感情が、それぞれ生起することを明らかにしている。

また新井(2000)は、大学生のサークル集団内における先輩後輩関係を検討している。新井(2000)では、大学生を対象とした質問紙調査の結果、後輩から先輩に対して生起する行動（対先輩行動）には「親交」

「礼儀」「服従」「衝突回避」「参照」「攻撃」の6つの側面が見出された。このうち「参照」行動は、先輩の個人的な魅力勢力や専門勢力などのポジティブな勢力によって生起していた。対先輩行動は、年功序列に基づいた学年・年齢などの比較基準によって上位者と判断された先輩に対して行われる行動であるが、その中でも参照行動は、専門性などの点で先輩と自分を比較し、先輩がより優れていると感じるほど、生起していると考えられる。

澤田(2002)や新井(2000)に見られたように、上下関係意識に関しては、比較基準と、比較した結果として生じる他者に対する行動・感情との間に、一定の対応関係があると推定される。したがって本研究では、大学生の対人関係において、上下関係の基準と、それぞれの比較基準で上位者と判断された他者に対して生起する行動・感情との関連を検討する。

比較基準の重視度の個人差

さらに本研究では、それぞれの比較基準を重視する程度に個人差があると仮定し、この点についても検討する。社会的比較研究では、社会的比較を行う程度と心理的特性との間に関連があることが明らかになっている(外山, 2002)。したがって、年齢・容姿・能力などの比較基準を重視する程度には、個人差があるものと考えられる。たとえば、優勝劣敗にこだわる負けず嫌いの傾向が強いほど、他者との能力差を重視しやすく、社会慣習・伝統的な制度に対して肯定的な態度を持っているほど、年齢や学年を重視すると予想される。さらに、他者に自分がどう見られているかを気にする人ほど、年齢・容姿・能力などの全ての側面を重視すると考えられる。

以上の論点に基づいて本研究では、個人特性として、保守性、公的自意識、優勝劣敗にこだわる負けず嫌い傾向をとりあげ、これらの性格特性と、比較基準の重視度との関係を検討する。

本研究で扱う対象

社会的比較研究においては、青年期が人生の中で最も社会的比較を行う時期であること、自分と性や年齢の点で似ている他者が比較の相手として選ばれることが明らかになっている(高田, 1992)。以上の知見に基づき、本研究では、大学生を対象として、自分と同じ年代の同性の相手に対する比較基準について検討する。

本研究は、大学生の上下関係意識の比較基準となる、年齢、学年、容姿、能力などの構造について検討し、それぞれの比較基準で「上位」と判断された他者に対して生起する行動・感情と比較基準との関連を検討する。同時に、それぞれの比較基準を重視する程度の個人差と、他の個人特性との関連を検討する。個人差に関する仮説は以下のとおりである。

仮説1:優勝劣敗にこだわる負けず嫌いの傾向が強いほど、他者との能力差を重視する。

仮説2:社会慣習・伝統的な制度に対して肯定的な態度を持っているほど、年齢や学年を重視する。

仮説3:公的自意識が高いほど、年齢・容姿・能力など比較基準のすべての側面を重視する。

方法

茨城県内の国立大学の大学生 232 名(男性 103 名、女性 129 名)を対象とした質問紙調査で、5名の協力者による個別配布・個別回収形式で、無記名で行った。調査時期は 2002 年6月～7月であった。質問紙の構成は以下のとおりである。

(1)フェイスシート:所属、学年、年齢、性別を尋ねた。

(2)公的自意識:人から見られる自分の側面に注意を向ける傾向を測定するため、菅原(1984)の自意識尺度の下位尺度である公的自意識の 11 項目を用いて、「7. 非常にあてはまる～1. 全くあてはまらない」の7件法で回答を求めた。

(3)優勝劣敗への過敏さ:人との優劣に対する敏感さの傾向を測定するため、曽田・高瀬・中安(1992)の負けず嫌い尺度の下位尺度である「優勝劣敗への過敏さ」の4項目から、適切と思われる3項目を選定して用いた[2)]。「5. あてはまる～1. あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

(4)道徳・秩序:道徳や秩序を遵守する傾向を測定するため、東(1990)の保守性尺度の下位尺度である道徳・秩序(3項目)を用いた。「5. あてはまる～1. あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

(5)比較の結果生起する行動・感情:比較基準については面接調査の結果[3)]と高田(1990)とを参考に 10 項目を選定し(Table 1、Table 2 に示す)、行動・感情については、面接調査の結果と新井(2000)、澤田(2002)を参考に 12 項目を選定した(Table 1に示す)。質問紙においては、自分と年の近い同性の人を想定させ、Table 1に示す10項目に対応する比較基準のそれぞれについて、上であると認識した相手に対してとる行動や感じる感情を「5. あてはまる～1. あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

(6)各比較基準の重視度:Table 2 に示す比較基準10項目について、人とかかわるときに重視する程度を尋ねた。「あなたは人とかかわるときに、以下のことがどの程度気になりますか」という教示文で、それぞれ「5. 気になる～1. 気にならない」の5件法で回答を求めた。[4)]

Table 1 双対尺度法（クロス表に基づく数量化Ⅲ類）に用いたクロス集計表

	ルックスがいい人	知識が豊富な人	少し年上の人	お金やものをたくさん持っている人	学年が上の人	異性に人気がある人	有名私立大学に通っている人	友達の多い人	要領のよい人	スポーツのできる人
敬語を使う	1.65	2.23	4.23	1.74	4.36	1.54	1.52	1.51	1.61	1.70
礼儀に気を使う	1.84	2.29	4.10	1.86	4.12	1.58	1.65	1.61	1.68	1.76
言われたことに従う	1.70	2.54	3.17	1.67	3.12	1.55	1.50	1.64	1.97	1.73
嫉妬を感じる	2.64	2.43	1.49	2.62	1.50	2.84	1.82	2.24	2.39	2.51
リーダーシップを任せる	1.94	3.37	3.53	1.71	3.57	1.81	1.93	2.91	3.08	2.25
関わらないようにする	1.80	1.71	1.74	1.93	1.67	1.87	1.77	1.64	1.84	1.68
引け目を感じる	2.62	2.78	1.74	2.26	1.63	2.44	1.84	2.16	2.24	2.49
表面的に合わせる	2.25	2.31	2.81	2.11	2.67	2.09	1.98	2.19	2.17	1.88
反発を感じる	1.91	1.95	1.73	2.06	1.63	2.08	1.72	1.72	2.22	1.70
比較されたくないと思う	3.17	2.98	1.75	2.38	1.76	3.00	2.25	2.32	2.53	2.84
尊敬する	2.11	3.91	2.81	1.85	2.76	2.08	2.04	3.04	3.16	3.73
親しくなりたいと思う	3.11	3.63	3.09	2.78	3.14	2.85	2.69	3.53	2.96	3.31

数値は1～5点に分布し、得点が高いほど想定される相手に対して行動･感情を起こしやすいことを示す。

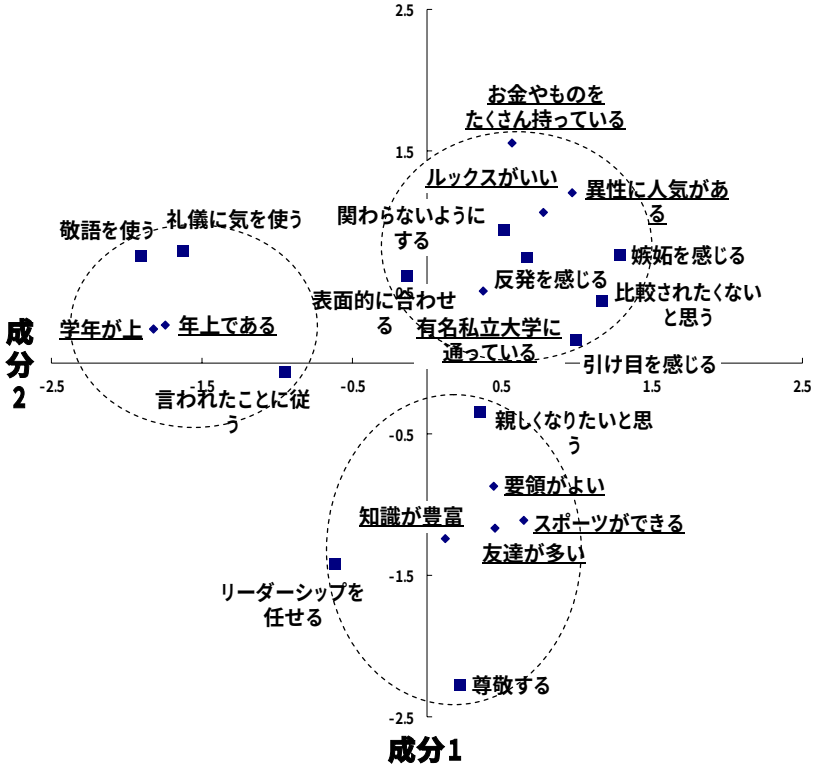

Figure 1 上下関係意識の比較基準と行動・感情との関係を表す数量化Ⅲ類の結果のプロット図
◆下線は比較基準を、■は行動・感情をそれぞれ示す

Table 2 比較基準の重視度の因子分析結果

項目内容	因子1	因子2	因子3	平均
自分よりルックスがいいか	**.834**	.128	.167	2.53
自分よりお金や物をもっているか	**.779**	.272	.154	2.07
自分より異性に人気があるか	**.769**	.365	.035	2.27
有名私立大学に通っているか	**.572**	.274	.139	1.55
自分より要領がよいか	.190	**.830**	.164	2.43
自分よりスポーツができるか	.195	**.796**	.163	2.34
自分より友達が多いか	.417	**.674**	.030	2.23
自分より知識が豊富であるか	.334	**.646**	.141	3.00
自分との年齢差があるか	.114	.082	**.925**	3.46
自分と学年が異なるか	.092	.144	**.918**	3.30
因子寄与率(%)	26.0	25.2	18.5	

Table 3 比較基準の重視度と個人特性との相関

	外見・評判	能力	年齢・学年
公的自意識	.48**	.35**	.22**
負けず嫌い	.29**	.19**	.04
保守性	.19**	.20**	.07

N=232 **p<.01

結果

比較基準と行動・感情の関係

比較基準と行動・感情との関係を分析するために、クロス表を用いた数量化Ⅲ類(双対尺度法)を行なった。分析にあたっては、比較基準である 10 項目をアイテムカテゴリーとし、行動・感情の 12 項目をサンプルとして、平均値をデータとして解析した(解析に用いたクロス表を Table 1 に示す)。解析の結果得られたそれぞれのスコアをプロットした図を Figure 1に示す。

分析の結果、比較基準と行動・感情は3つの領域で解釈された。Figure 1の右部の領域①には、『外見・評判』に対応する基準と、行動・感情の「関わらないようにする」、「表面的に合わせる」、「反発を感じる」、「比較されたくないと思う」、「引け目を感じる」、「嫉妬を感じる」が含まれた。Figure 1の下部の領域②には、『能力』に対応する比較基準と、行動・感情の「親しくなりたいと思う」、「リーダーシップを任せる」、「尊敬する」が含まれた。Figure 1の左部の領域 には、『年齢・学年』の比較基準と、行動・感情の「敬語を使う」、「礼儀に気を使う」、「言われたことに従う」が含まれた。

比較基準の重視度の構造

重視する比較基準 10 項目について、因子分析(主成分解、バリマックス回転)を行った。その結果、因子の解釈可能性から3因子が抽出された。3因子による累積寄与率は 69.7%であった。因子負荷量行列を Table 2 に示す。

第1因子は、人の外面的な部分やその評判であると解釈し、『外見・評判』基準と名づけた。第2因子は、人の能力に関する因子と解釈し、『能力』基準と名づけた。第3因子は年功序列を基盤とした因子であると解釈し、『年齢・学年』基準と名づけた。これら3つの因子に負荷の高かった項目(Table 1中の下線部)について、合計得点を算出し「比較基準重視尺度」を作成した。

尺度ごとの平均値をみると、『外見・評判』が 2.10、『能力』が 2.51、『年齢・学年』が 3.38 であった。この尺度は理論的に1～5点に分布し、平均値は3であることから、『年齢・学年』は中程度に重視されており、これに比べると『外見・評判』や『能力』は重視されていないと解釈される。

比較基準重視尺度の各下位側面について、男女間の性差の検定を行った。その結果、能力重視尺度(t(230)= 2.03, p<.05)と年齢・学年重視尺度(t(230)= 2.43, p<.05)のそれぞれについて性差が見られ、どちらも男性の方が有意に高かった。

比較基準の重視度と個人特性との関係

比較基準重視尺度の各下位側面と、個人特性との相関係数を算出した。結果を Table 3 に示す。

公的自意識は『外見・評判』『能力』『年齢・学年』のすべての比較基準重視尺度と有意な相関が見られた。負けず嫌い傾向と保守性は、どちらも『外見』『評判』と有意な相関が見られた。

考察

比較基準の構造

上下関係意識の比較基準は、個人の重視傾向(因子分析)と、行動・感情との関係(数量化Ⅲ類)の双方で、「外見・評判」「能力」「年齢・学年」の3つのまとまりに分かれた。このうち「外見・評判」は2者関係の比較的初期の段階から明らかになる側面であり、「能力」は関係が深まってから明らかになる側面であると考えられる(松井, 1993)。さらに「年齢・学年」は、関係のどの段階においても明確な比較基準として2者の関係を規定すると考えられる。

外見や評判で自分より上であると判断された他者には、内心では嫉妬や反発をしながら、接触そのものを回避していた。これは、外見や評判の側面は自己の努力などによって変化させることが難しく、この点で自分より優れている相手には、比較されることを避けようとして回避的な行動をとるためと考えられる。また、能力や友達の多さの点で自分より優れている他者には、親和的・参照的行動が生起していた。これは、能

力の高さや人間関係の良好さは、外見や評判に比べて自己の努力によって改善することが容易であり、相手の長所を取り込もうとして親和的な行動が取られるためと考えられる。さらに、年齢や学年という比較的明確な基準で上位者と判断した場合には、礼儀や服従などの下位者としての規範的な行動がとられていた。これは、年齢や学年などの明確な基準で比較した場合には、社会における年功序列規範が意識され、この規範にもとづいた行動をとることが望ましいと判断されたためと考えられる。

側面ごとの平均値を比較すると、「年齢・学年」がもっとも重視されており、それに次いで「能力」と「外見・評判」が重視されていた。この結果から大学生は、「年齢・学年」を相手とのコミュニケーションの型を決める基準として最も重視していると考えられる。能力や外見・評判という、相手への接近や回避に関わる基準の重視度が低かった点については、これらの基準をあまり重視していないと本人は考えているにもかかわらず、実際の友人関係の構築においては重要な規準になっていると考えられる。

新井(2000)における対先輩行動と対照すると、『外見・評判』には『衝突回避』が、『能力』には「親交」「参照」が、『年齢・学年』には「礼儀」「服従」が、それぞれ生起していると考えられる。また、澤田（2002）においては3つの領域に分かれた妬み感情は、本研究においては『外見・評判』の基準で比較した他者に対してのみ生起していた。澤田（2002）においては『年齢・学年』の側面は扱われていないため、『能力』の側面に関する結果が異なっていると考えられる。すなわち児童を対象とした澤田（2002）の結果では『能力』に関して相手より劣っていると感じると「くやしい」「恥ずかしい」などの感情が生起するのに対し、大学生を対象とした本研究の結果では相手に近づこうとしていた。したがって相手に劣ると認識した場合、児童期にはくやしさや恥ずかしさという対自的な反応を引き起こすが、自己意識が安定してくる青年期には、相手への接近という外的な行動をとるという、発達的変化が起こることが示唆される。

比較基準重視傾向と個人特性の関係

公的自意識が高い人ほどどの側面も重視し、負けず嫌いや保守的である人ほど「外見・評判」と「能力」を重視していた。

仮説1は支持された。すわなち、公的自意識が高い人は、他者からどのように見られているかという自己の側面に注意を向けやすいため、あらゆる側面から他者と自己を比較し、相手との関係のあり方を決めていると考えられる。

仮説2も支持された。優勝劣敗にこだわる人は、年齢や学年などの変えることのできない基準にはこだわらず、外見・評判や能力などの、不明確で変えることの可能な基準を重視し、他者と自分を比較して優越感や劣等感を感じると考えられる。

仮説3は支持されなかった。本研究では保守性が年齢や学年とは関連が見られず、外見・評判と能力に関連が高かった。すなわち保守的な人ほど、不明確な基準にこだわって他者との関係を比較していることが示唆された。この結果は、年齢や学年という明確な基準よりも、能力や外見などの、上下関係を乱す要素になりうる不明確な基準を無視できないためと考えられる。

まとめ

本研究は、大学生の上下関係意識の比較基準と、それぞれの比較基準で「上位」と判断された他者に対して生起する行動・感情と比較基準との関連を検討した。また、どの比較基準に着目するかという個人差と、他の個人特性との関連を検討した。

本研究では、上下関係意識の比較基準が、「外見・評判」「能力」「年齢・学年」の3つに分けられた。『外見・評判』での上位者には相手を嫌い回避しようとする『嫌悪・回避』が生起した。『能力』での上位者には、尊敬の念を持ち、親密になろうとする『親和・尊敬』が生起した。『年齢・学年』での上位者には、礼儀を重んじ従おうとする『礼儀・服従』が生起した。

個人特性について検討した結果、公的自意識が高い人は『外見・評判』『能力』『年齢・学年』のすべての基準を重視し、優勝劣敗にこだわる人や保守的な人は『外見・評判』『能力』の基準を重視していた。

今後の課題

本研究には、以下の2点の課題が指摘される。

第1に、比較基準重視の個人差に関して、「外見・評判」と「能力」と間に、行動・感情との関連では差異が見られたものの、個人特性との関連では差異が見られなかった。「外見・評判」と「能力」の違いを、個人特性の点からも明らかにする必要がある。

第2に、本研究では、大学生のみを対象として検討を行った。高田（1990）では、大学生とより成人では社会的比較の注目する側面や比較の結果が異なることが指摘されている。また、明確な基準についても、企業や学校組織で生活している成人や児童は、それぞれ大学生とは異なる上下関係意識を持っている可能性がある。本研究の結果を発展させ、対象を広げて検討をする必要がある。

引用文献

新井洋輔 2000 セミフォーマル集団における上下関係 (1) ーサークル集団における対先輩行動ー 日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集 180-181.
淵上克義 2002 リーダーシップの社会心理学 ナカニシヤ出版
東正訓 1990 現代大学生の社会的態度間構造に関する研究 社会心理学研究, **5**, 1-11.
松井豊 1993 恋ごころの科学 サイエンス社
森博 1970 現代社会論の系譜 誠信書房
森博 1993 上下関係 森岡清美・塩原勉・本間康平(編) 新社会学辞典 有斐閣
澤田匡人 2002 児童・生徒における領域別に見る妬み感情の反応傾向 日本発達心理学会第13回大会発表論文集 306.
曽田邦子・高瀬さおり・中安裕子 1992 実家システムの視点から見た中学生の無気力と家族関係:オルソン円環モデルに準拠して 関西学院大学社会学部紀要, **66**, 159-164.
菅原健介 1984 自意識尺度(self consciousness scale)日本語版の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
田島司・波多野純 1996 大学生のスポーツ集団に見られる年功序列的規範と集団機能との関係 日本心理学会第 37 回大会発表論文集 158-159.
高田利武 1990 他者と比べる自分 サイエンス社
外山美樹 2002 社会的比較志向性と心理的特性との関連:社会的比較志向性尺度を作成して 筑波大学心理学研究, **24**, 237-244.
山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

註

1) 本研究は、筑波大学人間学類の飯村北海、佐藤章子、鈴木千草、本田真大、柳鳥望美の各氏と共同で行なわれた。
2) 選定された項目は、「勝ち負けにはとてもこだわるほうだ」「勝負は勝たなければ意味がないと思う」「自分は常に一番であるべきだ」の3項目であった。
3) 上下関係意識の比較基準と、比較の結果生起する行動・感情を抽出するため、国立大学の大学生5名を対象として面接調査を実施した。
4) 本研究では、他の変数に関しても測定しているが、本報告では省略する。

The relationship of behavior and affection, to that of the comparison standard which occurs within hierarchical-treatment of those who are of close age

Yosuke ARAI*(Institute of Psychology, University of Tsukuba)*
Yutaka MATSUI*(Institute of Psychology, University of Tsukuba)*

This study aims to examine structures of the comparison standard which has created a hierarchical-treatment such as age, grade of school, appearance, and capability. Furthermore, it will consider the relationship between such comparison standards and the behavior and affection which occur between those judged to be of a higher rank on each comparison standard. A questionnaire of 232 college students was conducted. As a result of factor analysis, the comparison standard was divided into 3 groups. They are; "appearance and reputation", "capability" and "age and grade". As a result of quantification method of the third type, which considered the relationship between a comparison standard and behavior and affection, those judged to be of a higher rank in "appearance and reputation" would be "disliked and avoided". Furthermore, those judged to be of greater "capability" would receive more "respect and affinity". It also follows that, those judged to be of a higher social rank (i.e. age and grade) would receive more "courteous and obedient". As a result of examining individual differences, people with high public self-consciousness thought "appearance and reputation", "capability", and "age and grade" ware all important. Furthermore, conservative people and the people adhering to the idea of superiority or inferiority thought the standard of "appearance and reputation" and "capability" were important.

Keywords: hierarchical-treatment, comparison standard, interpersonal behavior, interpersonal affection